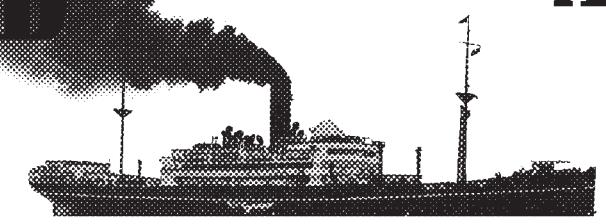




神戸港からの眺め

KOBE KO KARANONAGAME





神戸スタディーズ#5

神戸港からの眺め

KOBEKO KARANO NAGAME

神戸スタディーズとは

「神戸ってどんなまち？」と聞かれて、あなたはなんと答えるでしょうか。さまざまに語られる神戸というまちのイメージをあらためて考えるため、多様な専門分野の方を講師に迎え、これまでなかった視点で神戸を見る「神戸学」をつくる試みです。

今回は、神戸ファッション美術館、真田岳彦氏と企画連携し、開催しました。

眺めからの神戸港

神戸スタディーズ #5



モデレーター | 芹沢高志

デザイン・クリエイティブ
センター神戸 センター長

1951年東京生まれ。89年にP3 art and environmentを開設。99年までは東長寺境内地下の講堂をベースに、その後は場所を特定せず、さまざまなアート、環境関係のプロジェクトを展開している。アサヒ・アート・フェスティバル事務局長(03~16年)、横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」総合ディレクター(09年、12年、15年)、さいたまトリエンナーレ2016ディレクター。

「神戸スタディーズ」とはさまざまな角度から神戸という街に光を当て、もうひとつの神戸像を浮かびあがらせていこうとする試みである。その「神戸スタディーズ」も5回目を迎えた。

今回は、あえて神戸イメージの定番とも言える「港」に注目した。2017年1月に開港150年を迎えた港。港町神戸は、今も神戸を代表するまちのイメージだ。しかし、港そのものの実態と歴史は意外に知られていない。

加えて、デザイン・クリエイティブセンター神戸の建物は、旧神戸生糸検査所を転用したものだ。当センターの愛称をKIITOとしたのもそんな理由からだった。そこで当センターとしての関心、あるいは必然性からも、まずは「生糸」、「絹」を手掛かりに、神戸港を見ていこうと考えた。神戸港からの生糸輸出は、大正から昭和初期にかけて最盛期を迎え、神戸生糸検査所は近代日本の産業や文化を海外に輸出するための重要な拠点となっていた。モノと人の往来。入口であり出口である場所。そんな港の姿を通して、神戸という街を見直してみたいと考えたのだ。

そのために3つの視点を用意した。

まずは中村善則氏の「油彩画が物語る神戸の歴史」。《神戸港眺望》なる一枚の油彩画を読み解くところから始まって、大正14年の「日本絹業博覧会」開催まで、当時の活気に満ちた神戸を鮮やかに描き出してくれた。

2回目は神戸ファッション美術館で開催された「神戸 絹の道〜『養蚕秘録』を尋ねて〜」展共同企画者、眞田岳彦氏の「神戸 絹の道」。輸出といっても、そもそも輸出されるものはどこかで生産されているわけで、眞田氏の養蚕、製糸が行われていた但馬、丹波への取材の旅はとても印象的だった。

眞田氏の視点が内陸に向けられていたとすれば、3回目の山崎稔恵氏の「神戸横浜 絹『もの』がたり」は外に向けられた視点だろう。神戸と、もうひとつの代表的な貿易港、横浜の、二つの港の物語だ。激しく競い合うライバルでもあったが、少し引いて見てみれば、共に殖産興業の大波の中で翻弄された姿も見えてくる。

モノが行き交い、それに伴ってさまざまな人が行き交う。中村氏の話に出てくる台湾航路や小田萬蔵、眞田氏が訪ねる但馬、丹波の生産者たち、山崎氏の話に現れる神戸、横浜の貿易商たち。さまざまな人が港を介して交差する。それこそが港の醍醐味、ダイナミズムに他ならない。どの回も、生糸、絹に軸足を置きながら、人々の顔がくっきりと浮かび上がってくる神戸スタディーズだった。

港性——この深遠なテーマについては今後ともしっかりと向き合っていきたいと思う。

1997年に神戸市立博物館に寄贈された、神戸港を描いた油彩画をきっかけに、制作にかかわった生糸輸出商、大正14年の「日本絹業博覧会」、神戸の生糸貿易について調査された中村善則さんに、一枚の油彩画からひもとく神戸と生糸の歴史のお話をうかがいました。

油彩画が神戸の歴史を語る

第1回

2017年1月12日(木)
会場:デザイン・クリエイティブ
センター神戸(KIITO) 3階303



講師 **中村善則**
元・神戸市立博物館学芸員

1948年生まれ。大阪市立大学文学部卒業。74年より神戸市に入所し、文化財調査担当学芸員及び博物館学芸員(考古学)として勤務。2008年に神戸市立博物館学芸課長で退職。08~13年まで神戸ファッション造形大学教授(博物館学芸員課程担当)。

開港 150 年を迎えた神戸港の昔の姿を知るには、絵画や絵葉書などを手掛かりとすることができる。そうした作品、資料の一つとして神戸市立博物館所蔵の《神戸港眺望》という油彩画をあげることができる。この絵画は、博物館と同じく旧外国人居留地内にあった神戸生糸取引所から寄贈されたのであるが、戦後生糸取引所が再建されたときに旭シルクという会社から取引所に寄贈されたと伝えられていた。

昭和 13 年 (1938) の春 (初夏かもしれない)、東風が吹くよく晴れた日の午前。これがこの絵画に描かれた神戸港の姿である。画家の名は絵の左下隅にサインのある「y. kojima」。この絵画以外には作品は知られていない。

絵には戦前の神戸港を代表するような事物が漏れることなく盛り込まれている。造船神戸の象徴であった川崎造船所のガントリークレーンを遠くに望み、第一突堤、メリケン波止場、中突堤、高濱倉庫群などを描く。そして数えられないほどの舢舨、船舶、パイロットボート。昭和 11 年 (1936) にやっと完成した中突堤には、これまた 12 年に竣工し、神戸と基隆を結ぶ台湾定期航路に就航したばかりの、ひときわ大きな最新鋭貨客船、富士丸 (近海郵船) と高砂丸 (大阪商船) が並んで停泊している。さらに調べていくと、水上警察署の付属屋、第一突堤に停泊する天津航路の船のマストの形状など、画家が港の事物を忠実かつ正確に描いていることがわかる。

横長のパノラマ風に描かれた範囲を取れんさせると、大阪商船 (現商船三井) ビルの5階あたりに行きつく。そこは小田萬蔵が起こした旭シルクの事務所が、大正 12 年 (1923) から昭和 38 年 (1963) ごろまでであった場所。おそらくは小田か旭シルクの関係者がこの繁栄する神戸港の姿を描いた絵画を発注し、事務所の一隅に架けていたのではないだろうか。

小田は、関東大震災 (大正 12 年9月) で壊滅的な打撃を受けた横浜からの生糸輸出を見限り、いち早く神戸で商売をしようと、震災から2週間後には来神している。そしてアメリカへの輸出に成功した。やがて、横浜から神戸に来ていた生糸の輸出業者が横浜貿易復興会の働きかけで戻っていくなか、小田は神戸に留まって商売を続け、大正 14 年 (1925) には神戸での取扱高の実に半数近くを占めるまでになった。彼こそが生糸輸出が横浜一港から、神戸を加えた二港になった立役者であると言われた。

震災を期に再開された生糸輸出を定着させるため、神戸の政財界は大正 14 年 4 月~5 月に日本絹業博覧会を開催した。博覧会総裁は県知事、副総裁は神戸市長、さらに会長は川崎造船所の松方幸次郎という顔ぶれであった。海岸通埋立地に竣工したばかりの水上警察署の建物を第一会場、湊川公園を第二会場として、出品物 42000 点余りを集めて展示した。入場者は約 66 万人であった。

奇しくもこの大正 14 年には生糸輸出額は戦前の最高額を記録したが、神戸港の取扱額は全体の 16% 強を占めるまでになっていた。昭和に入って金融恐慌や世界恐慌の影響で生糸の輸出額は低迷を続け、やがて戦争の激化によって輸出は途絶えてしまう。

戦後、新商品取引法にもとづき、昭和 26 年 (1951) に神戸生糸取引所は開設された。その準備段階から中心的な役割を果たした小田は、初代の理事長に就任した。小田は生糸輸出や神戸港が戦前のような賑わいを取り戻すことを願って、海岸通り 5 番の事務所にあったこの絵画を京町 79 番にできた取引所に寄贈したのではないだろうか。その後絵画は播磨町 49 番、東町 126 番と取引所移転に伴って、旧居留地内を転々とする。

描かれてから 60 年あまり、神戸港のすぐ近くにあり続けたこの絵画は、阪神淡路大震災を経て、京町 24 番に建つ市立博物館 (旧横浜正金銀行神戸支店) という安住の地に収まった。

開催風景





①



②



③



④



⑤

- ① y.kojima《神戸港眺望》1938年、油彩、キャンパス（神戸市立博物館蔵）
- ② 「本邦最初の試み 日本網業博覧會」会場案内チラシ（神戸市立博物館蔵）
- ③ 「神戸市立博物館総合案内」1988年、p.57「居留地の地番」を筆者が改変
- ④ 神戸港之全景 絵はがき（神戸市立博物館蔵）
- ⑤ 神戸港の景観 岸壁巨船解纜の情景 絵はがき（個人蔵）

神戸ファッション美術館で開催された「神戸絹の道」展を訪問し、展示を鑑賞しながら、同展の共同企画者・真田岳彦さんに、神戸から養蚕、製糸が行われていた但馬、丹波までを取材し見えてきた衣服文化や人の暮らしについて、お話をうかがいました。

第2回 神戸絹の道

共催：神戸ファッション美術館

2017年1月21日(土)
会場：神戸ファッション美術館
4階ギャラリー、セミナー室



講師 真田岳彦
衣服造形家、女子美術大学教授
東北芸術工科大学客員教授

衣服、テキスタイルを通して地域、人づくりに取り組む。1962年東京生まれ。ISSEY MIYAKE INC. にて衣服を学び92年渡英。彫刻家 RICHARD DEACONの助手を経て95年帰国し独立、SANADA studio設立。以降、国内外の美術館・ギャラリーで衣服／繊維作品発表、染織地域プロジェクト、企業へのアート&デザインディレクション、人材育成組織設立など行う。

私は、繊維・衣服を通して、展覧会や地域プロジェクトを開催している。各地域の様々な根源的な事物や素材に触れ、土地や人の物語を知り、人に感動を伝えたいと思ってきた。そして、今回、「神戸の絹」と向き合うこととなった。桑都と呼ばれた八王子生まれの私にとり、思い入りの調査紀行となった。

私はまず今回の調査では、三但（但馬、丹波、丹後）地域に行きたいと思った。享和3年（1803）に書かれた和本『養蚕秘録』と出会ったからだ。著者である上垣守国は、但馬（現在の養父市蔵垣）に生まれ育ち、その時代、養蚕に関する先進地であった奥州福島に10代で赴き、その知識と技術を学ぶ。帰郷後、三但地域にこれを伝え地域の生活を助けた。そして48歳の時に長年の研究成果をまとめたものがこの『養蚕秘録』である。シーボルトは本書をオランダに持ち帰って翻訳し、蚕の伝染病により衰退していたフランスの養蚕業に寄与したとも伝えられる。私は、上垣守国のような人物を輩出した風土と、雪深い土地で養蚕、製糸、織を行い、日本の経済と衣服文化を支えてきた郷土のチカラとは何かを、目で見ても肌で感じたいと思い、神戸ファッション美術館学芸員の次六尚子さんとの旅を始めた。

私たちは、JR 播但線姫路駅から和田山駅、そしてJR 山陰線に乗り換え八鹿駅まで単線に揺られた。江戸時代、この鉄道に沿う道では、馬車により銅、銀、鋳物が運搬されたと言われ、この地域が繁栄した痕跡は今も沿線の駅には残っている。八鹿駅から向かった養父市大屋町蔵垣・大杉地区は養蚕の里だった。かいこの里の中にある、養父市立上垣守国養蚕記念館では養蚕の復興に情熱を注ぐ松原夫妻と、その活動を共にする仲間達に会うことができた。

現在、養父から丹波への道はトンネルができ交通は容易くなっているが、私たちは昔と同じ険しい山道を抜けた。街道はやがて民家が無くなり、草木が鬱蒼と茂る山中に入る。やがて頂上を抜けると平野が開け、再び人家が現れた。製糸の里、丹波市青垣町佐治地区である。

丹波では、丹波布伝承館 / 技術保存会の方々に話を聞いた。ここでは、すでに地域の人たちが何十年にも渡り、丹波布の伝承活動を続けており、丹波布という呼び名は、柳宗悦氏の命名と説明をうけた。それ以前この地域では、横糸の一部に太めの絹糸を使用するため縦縞が抜かれたように見えるために「縞ぬき」と呼んでいたということだった。私は、地域で誰知れず付けられた「縞ぬき」という呼び名に心地よい響きを感じた。また丹波布技術保存会の方に、地域特有の「つまみ糸」作りを実演していただいた。繭を湿らせ、指で糸を引出すため節がうまれる絹糸を布に織り着用したと言われる。但馬、丹波には、多くの絹の文化が今も引き継がれていきている。生きるために豊かな時間を過ごす。それが地域に継がれてきた絹の文化の意味なのだった。

旅から帰ると、養父で分けていただいた但馬産の貴重な繭100頭分で作品の制作を始めた。繭を精練し真綿にして丹波の人たちと同じように真綿から「つまみ糸」を引いた。すると数本の細い美しい繊維束になる。まだ撚りを入れないその繊維束の状態は、蚕が吐いた瞬間を見せてくれるように、美しく細かい波を打っている。波打つ束は、光が当たり光沢を放ち美しい。それに手のひらで撫でるように転がし撚りかける。絹の糸がうまれる。養父の大地が育んだ桑の葉を蚕は食み、生まれ、繭をつくる。そして、人はその繭を真綿にし、真白な糸を生む。繭から糸を引いた私の心には、蚕が繭に、繭が真綿に、真綿が素糸へと遷るように、あの風土のなかで葛藤し、直向きに生きた人々の清白な姿が浮かんだ。そして《際／開 Sai / Kai》という作品が生まれ展示会場に置いた。

展示初日の開催となった本講座当日は、芹沢さんと神戸の絹や、私も繊維を通じて関わってきた地域プロジェクトの話しを交わした。地域には、元来、土地の持つチカラがある。その土地に暮らした人々は、その土地だからできる事を駆使して生きてきたことを改めて感じた。

今回丹波を訪れたとき、上垣守国について尋ねてみたが、その名を知る人はいなかった。しかし、私は寂しい気持ちにはならなかった。日本でも世界でも、卓越した先人たちが地域を育み、その智慧が生活を支えているが、時を経て、その名が人々の記憶から消えることも多い。しかし、智慧は風習となり文化と呼ばれるような事物にもなる。それが連続と続き世代をこえ、地域に生きる人々の誇りとして引き継がれてゆく。

「神戸 絹の道」、そこには今も、人々の誇りとして絹の文化は継がれている。

謝辞

今回の調査は、「絹」を主軸に据えた企画を通して神戸という土地が持つチカラを見直し、未来に向かう智慧を見出したいとの思いに、神戸市内の文化施設間での協力が始まった。特に神戸ファッション美術館学芸員の次六尚子さんには1年間以上にわたり共に調査いただき、制作にもご尽力いただいた。また調査の旅先でお訪ねした皆様にも貴重なお話をうかがうことができた。皆様のお力で実り多い調査と制作ができたことを心より感謝している。

開催風景



展示風景

2017年1月21日(土)～3月26日(日) 特別展「神戸開港150年記念 ファッション都市神戸ー輝かしき国際港と地場産業の変遷」関連
 地域連携企画 記録展示2016「神戸 絹の道～[養蚕秘録]を訪ねて」
 会場：神戸ファッション美術館4階ギャラリー 主催：神戸ファッション美術館 共同企画：真田岳彦



①



②



③



④

参考図版



⑤



⑥



⑦



⑧

- ① 神戸周辺の絹資料や但馬・丹波の養蚕道具や絹糸が展示された
- ② 但馬の真綿と錫箔を素材に使用した真田岳彦作品(際/開 Sai/Kai)
- ③ 輸出用に固く圧縮し束ねられた生糸括と生糸用商標
- ④ 元神戸生糸検査所(現・KIITO)で使用された検査機器
- ⑤ 養蚕独特な抜気屋根をもつ3階建養蚕農家住宅(養父市大屋町)
- ⑥ 地域の養蚕農具が保管される上垣守国養蚕記念館内観(養父市大屋町)
- ⑦ かつて賑わいを見せた和田山駅に残る大正から昭和の機関車庫跡
- ⑧ 丹波布技術保存会の取材(丹波市青垣町)

生糸に次ぐ重要な輸出品であった絹物、特に絹手巾に注目し、日本における手巾製造輸出の歴史、輸出振興と国威発揚のもと互いに凌ぎを削った神戸横浜の姿について、横浜市が所蔵する輸出スカーフ約12万点の調査研究に携わる山崎稔恵さんにお話をうかがいました。

第3回 「絹もの」 がたり 神戸横浜

2017年1月26日(木)
会場:デザイン・クリエイティブ
センター神戸(KIITO) 3階303



講師 山崎稔恵
関東学院大学教授

1954年神奈川県生まれ。お茶の水女子大学大学院家政学研究科修了。服飾美学・西洋服飾史専攻。18世紀イギリス芸術・文化研究に取り組む一方、近年は横浜輸出スカーフに関する調査研究も展開する。著書に『気取りへの視線』(関東学院大学出版会)、『芸術と服飾 あやなす景色』(同)など。

生糸に次ぐ輸出品として重要な位置を占めていた絹物*、なかでも絹手巾は貿易統計上突出した品目であったにもかかわらず、明治政府が欧米での日本趣味を好機に輸出を奨励したきものや陶磁器などのように文化史の表舞台にあらわれることはほとんどない。物品の性格上、どこかに埋もれ、あるいは保存に値せず後世に史料を遺していないことが最たる要因と考えられるが、ともあれ評判の高い服飾品であったことに相違ない。

本稿では、手巾の輸出進展に互いに鎬を削った明治・大正期の神戸横浜の諸相について、講座の一端を振り返る。

* 絹物とは…絹糸(=生糸を精練したもの)を材料とし製産されたものを指し、官庁統計や商習慣上は絹織物と絹製品とに大別される。織物には絹糸の太さや織り方のちがいで羽二重や縮緬、琥珀織など多種あり、それらを生地材料として手巾、肩掛、寝衣、着物、半被、帛紗などの製品がつくられる。

手巾の製造と輸出のはじまり

「手巾」は「てはば」「しゅぎん」とも読むが、もとより英語では「ハンカチーフ」のこと。文化11年(1814)発行の日本初の英和辞典『あんげりあごりんたいせい 諸厄利亜語林大成』では、何と「はなふき 洩巾」の訳語が当てられた。慶應元年(1865)、横浜開港後数年ならずして桐生の買次商小野里喜左衛門と横浜の貿易商椎野正兵衛が白地縮緬製の手巾(「外人用鼻拭」と記載)を輸出[桐生 1935]。手巾輸出の歴史はじつに明治以前に始まっていたということになる。しかし横浜税関の公式記録は明治6年(1873)4月16日を待たなければならない(①)。

日本初の洋装絹織物ブランド S. SHOBEY SILK STORE の色絵手巾

安政6年(1859)、横浜本町通りの絹物商店内に外国人向けストア「S.SHOBEY」を設置した椎野正兵衛は、明治6年(1873)ウィーン万国博覧会に織物商肝煎として随行、翌明治7年(1874)には現地で購入したハンカチーフを見本に羽二重製の手巾を考案した。その後、万国博覧会、内国勸業博覧会へと出品を重ね、白羽二重に刺繍、白絹糸紋織の手巾は海外で大

きな反響をよんだ。そして明治20年前後、S. SHOBEY ブランドは刺繍のみならず染めを施した色絵手巾の製造に成功、和魂洋才の美を湛えたハンカチーフはさらに欧米の人の心をつかんだという[椎野 2012] (②、③、④)。

絹手巾輸出好況のなりゆき

「絹布手巾(Silk Handkerchiefs)」「絹手巾」の品名が官庁統計に初出するのは明治20年(1887)のこと。大蔵省『大日本外国貿易年表』によればこの年、横浜港からは3,752,429枚、神戸港からは61,518枚が輸出された。椎野正兵衛商店を嚆矢とする手巾生産はその後各地に波及し、横浜輸出絹物同業組合調査「本邦絹製品品種輸出高」によれば明治22年には数量にして20年の約2倍、25年には約5.4倍、その後浮き沈みはあるものの大正中期まで概ね好調に推移した[横浜 1958]。この間の新聞に絹手巾好況の記事(『東京朝日新聞』明治29年5月9日付)も認められる。

ところが次第に、いかに安く大量に生産するかが眼目になってゆく。当初優良な品揃えで英国を始め欧州において人気を博した絹手巾は、価格競争を被るなかで製造業者が自滅的な手段に走り粗製濫造、需要は漸次減退した。繰り返される由々しき事態に、たとえば大正5年(1916)8月12日『時事新報』は、「我國の絹手巾商中に(中略)眼前の小利に汲々として自ら傷つくることの甚だしきを嘆ぜざるを得ず之を要するに輸出品中の大宗たる絹織物にして猶粗製濫造の聲を聞くことの多き、これ決して我國貿易上の名譽と申すべからず」と苦言を呈した。

神戸港絹物輸出の発展

「日清戦役時代より日露戦役時代は、神戸港絹物輸出の発展時代」とされる[生糸 1954]。神戸税関に残る明治11年からの統計がそれを裏付けるが、とりわけ明治30年前後の羽二重と絹手巾の価額急伸は、桐生から北陸地方へと羽二重の生産地が移り当地で手巾が生産、神戸港から輸出されたことを物語る。すこし先の証言になるが、明治45年(1912)6月25日『神戸新聞』の記事――。

本邦に於ける絹製品の輸出は生糸と共に従来殆んど横濱港の専有する處なりしも近時當港に於いても漸次増進の傾向あり羽二重の大部分は濠州に、手巾は濠州及はんからび比律賓諸島等に仕向けられ製品は石川、福井二縣の産出にして神戸市に於て加工の上輸出せられる

こうして染色加工し輸出する方が有利ということになり、明治末には相次いで染工場が設立、加工においてもミシン機を設備して絹手巾その他の縫加工に従事するものが増加、輸出絹物に必要な機関も漸次整備された。

一方、横浜を拠点とした外国商社や商店が支店を開設していることから神戸の繁栄が窺い知られよう(⑤、⑥)。

神戸横浜のせめぎ合い

思わぬ災禍がもたらす重大な影響についてはもはや言うまでもない。大正12年(1923)9月1日、関東地方を襲った大地震もまた神戸横浜両港の明暗を分けた。横浜が壊滅的な打撃を受けて僅か10日余の9月12日、日本輸出絹同業組合連合会は神戸港を日本最大の絹物輸出港となすことを決議、同時に運輸、通信、金融、染色加工機関の整備等について協議した[生糸1954]。同年10月12日『神戸又新日報』は神戸港の利点をあげ「結局は其全部当港に集中か」(⑦)とし、大正14年(1925)1月31日『神戸新聞』は「生糸では横浜に及ばぬが絹物の九割までが神戸から」(⑧)と伝えている。ただしこのときの「絹物」とは織物を指し、神戸市立生糸検査所に検査申込が殺到するほどの景況であったらしい。開港以来、優勢を誇っていた横浜は爾来奮起し復興への道を歩むことになる。

*

古き良き西洋趣味が漂うハイカラな街、神戸横浜——。明治30年代初頭、この「ハイカラ」が新帰朝者を冷評する言葉であったことは案外知られていない。また同じ頃政府のお雇い外国人で哲学者ラファエル・フォン・ケーベルは「西洋の曳綱に曳かれたる日本」と評した。

「神戸横浜 絹『もの』がたり」は、不自然な西洋化からくる歪みのなかで国威発揚、殖産興業、輸出振興に翻弄されたハイカラな街の歓喜と苦悩の歴史でもあった。

主な参考・引用文献および資料

- ・桐生織物史編集会『桐生織物史人物傳』(桐生織物同業組合、昭和10年)[桐生1935]
- ・『官許横浜毎日新聞』(復刻版、不二出版、1989-1990年刊)[不二1989-1990]
- ・神戸生糸絹市場三十周年記念祭委員会編『生糸絹織物と神戸』(神戸生糸絹市場三十周年記念祭委員会、1954年)[生糸1954]
- ・椎野秀聡『1859日本初の洋装絹織物ブランド S. SHOBEY』(椎野正兵衛商店、2012年)[椎野2012]
- ・『幕末明治在日外国人・機関名鑑: ジャパン・ディレクター』(立協和夫監修、ゆまに書房、1996年)[ゆまに1996]
- ・横浜輸出絹業史刊行会編『横浜輸出絹業史』(横浜輸出絹業史刊行会、昭和33年)[横浜1958]
- ・『大日本外国貿易年表』(明治15年~44年所収、大蔵省、1912年)
- ・村田誠治編『神戸開港三十年史下巻』(開港三十年記念会、明治31年)
- ・神戸大学経済研究所新聞記事文庫所蔵記事
- ・朝日新聞オンライン記事データベース
- ・読売新聞記事データベース

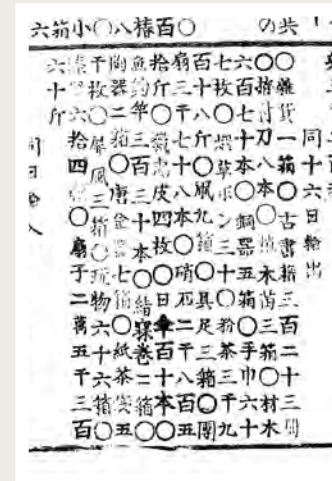
参考図版



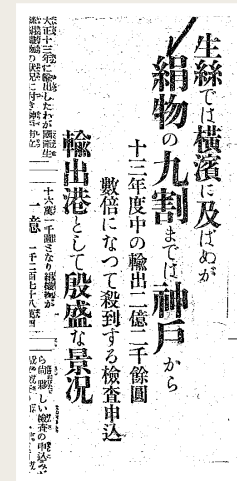
⑤



⑥



①



⑧



⑦

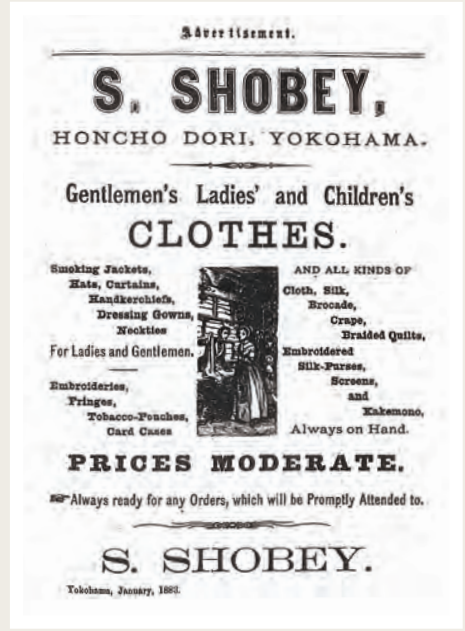


③

① 横浜税関の公式記録に掲載された明治6年(1873)4月16日の翌日4月17日付「官許横浜毎日新聞」輸出欄に「手巾六十七枚」の記事[不二1989-1990] / ② 最も古い色絵手巾の原図 明治初期(S. SHOBEY SILK STORE デザイン帖 所収) © S. SHOBEY SILK STORE / ③ 原図を元に復元された色絵手巾 © S. SHOBEY SILK STORE / ④ The Japan Directory(1883年1月刊)に掲載された英文広告[ゆまに1996]椎野正兵衛商店にとって手巾はドレッシングガウン(室内着)と並ぶ重要な製品であった / ⑤ 神戸北野に移設された旧外国人居留地京町83番のジャーディン・マゼソン商会の門柱 明治37-38年(1904-05)頃の建造とされる[2016年11月/筆者撮影]・横浜開港当初1860年に横浜山下町居留地1番地に設立された英国の商社 / ⑥ K. SHIENO SILK STORE製コートのタグ[YOKOHAMA & KOBE] © S. SHOBEY SILK STORE 椎野正兵衛の弟、椎野賢三はウィーン帰国後、明治12年(1879)に独自に横浜本町通に椎野賢三商店を構え、明治30年代に神戸支店を開設したと推測される / ⑦ 大正12年(1923)10月12日『神戸又新日報』「輸出絹織物と神戸港 結局は其全部当港に集中か」[神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫・神戸又新日報 絹織物業(4-177)] / ⑧ 大正14年(1925)1月31日『神戸新聞』「生糸では横浜に及ばぬが絹物の九割までが神戸から十三年度中の輸出二億二千余円数倍になって殺到する検査申込輸出港として殷盛な景況」[神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫・神戸新聞 絹織物業(5-042)]



②



④

デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) について

1927年、輸出生糸の品質検査を行う施設として、ゴシックを基調とした神戸市立生糸検査所(旧館)が建設されました。1932年には国に移管し、国立生糸検査所(新館)が東に建て増しされ、神戸港の生糸の輸出は、大正から昭和初期にかけて最盛期を迎えます。

近代日本の産業や文化を輸出するための重要な拠点だった生糸検査所は、その後役割を終えましたが、2008年に、神戸市がユネスコ創造都市ネットワークのデザイン都市に認定され、その創造の拠点=デザイン・クリエイティブセンター神戸として、2012年8月に開館しました。建物の歴史にちなみ、^{きいと}KIITOという愛称で呼ばれています。

センター2階の生糸検査所ギャラリーでは、生糸検査所時代に使用されていた検査機器や、生糸の品質検査の工程を紹介・展示しており、生糸検査所が建設されてからデザイン・クリエイティブセンター神戸に改修されるまでの歴史を知ることができます。



写真上から1,3,5:「神戸生糸検査所史」(1982、神戸農林規格検査所)より/2,4:伊東俊介撮影



神戸スタディーズ #5 「神戸港からの眺め」

執筆：眞田岳彦、芹沢高志、中村善則、山崎稔恵
デザイン：上田英司、叶野夢（シルシ）
発行：2017年3月

写真：【表紙】神戸 巨船、欧州に鹿島経つ埠頭の盛観 絵はがきより（個人蔵）
【表2】神戸名所 神戸港の風光 絵はがきより（個人蔵）
【表3】© 一般社団法人神戸国際コンベンション協会
【表4】神戸 埠頭の情緒悲喜交々 絵はがきより（個人蔵）

編集・製作・発行

KIITO:

DESIGN AND CREATIVE CENTER KOBE

デザイン・クリエイティブセンター神戸

651-0082 神戸市中央区小野浜町 1-4

TEL : 078-325-2235

<http://kiito.jp/>

本書の無断転写、転載、複製を禁じます。
© 2017 Design and Creative Center Kobe All rights reserved.